



**舎** 密局は、明治維新期における化学技術の研究や教育、さらには勲業振興のために作られた官営・公営の機関である。明治二年（一八六九）に大阪、翌明治三年（一八七〇）に京都にそれぞれ設置された。「舎密局」の「舎密」とは、宇田川榕菴著『舎密開宗』（一八三七～四七）以来幕末期に広く使用された、オランダ語のchemie（化学）に対する音訳である。

「舎密局」を語る際、オランダ出身の軍医アントニウス・フランシスカス・ポードイン（Anthonius Franciscus Baudin, 一八二〇～一八八五）まで遡ることが必要であろう。ポードインは文久二年（一八六二）、江戸幕府の招きを受けて来日、ポンペの後任として長崎養生所の教頭となる。その間、東京、大阪、長崎で西洋医学を広め、また養生所の基礎科学教育の充実に努めた。明治二年（一八六九）より大阪にできた大阪医学校ならびに大阪陸軍病院に勤務し、この間、明石博高はポードインより医学を学び、大阪医学校薬局主管兼看頭となっていた。その後、ポードインは大学東校（東京大学 医学部の前身）で教鞭をとり、明治三年（一八七〇）帰国の途に就くまで日本各所で西洋医学の普及に努めるほか、本国からハラタマを招聘するなどして、日本における物理学や化学の教育制度の充実に図った。

ポードインに招聘されたクーンラート・ヴォルテル・ハラタマ（Koenrad Wolter Gramma, 一八三二～一八八八）は、オランダ出身の陸軍軍医で理化学者である。慶応二年（一八六六）に来日し、長崎の分析究理所専任教師に就任。同所では、実験を取り入れた理化学教育を行った。明治新政府は明治元年（一八六八）、大阪に舎密局を設けて理化教育を行うことにし、ハラタマを派遣して開校準備に当たらせた。同局においてハラタマは、オランダから届いた実験器具や薬品を用いた実験を指導。その講義録『金銀精分』『理化新説』『試薬用法』などが訳出して出版された。当時、大阪医学校の薬局主管であった明石はハラタマに学んで舎密局の助手となり、その経験が後に京都舎密局の開設へと繋がっていく。

## 明石博高と舎密局

お雇い外国人たちとの関係を軸に

光平有希

明石が横村正直や山本覚馬に創設を強く進言した京都舎密局は、明治三年（一八七二）二月に仮設され、明治四年（一八七二）三月から薬物の実験を開始、明治五年（一八七三）一月には元門倉馬場屋敷跡に分局を竣工、そして明治六年（一八七四）には、鴨川西岸の夷川土手町に本館が新築落成した。京都舎密局では仮設時以降、「リモナーデ」（Limonade）や「ポンス」（Pons）の二種で焼酎に砂糖、橙汁、卵白を加えた「公膳本酒」、さらにヒポクラテスゆかりの「イボカラス酒」や日本初の「石鹼」「サラシ粉」「氷砂糖」などをつくって販売し、運営の主たる財源とした。「リモナーデ」は砂糖とクエン酸、そしてレモン油で作った酸味のある清涼飲料で、コレラ予防に効果があるとされた。また、明治八年（一八七六）二月からは当時文部省医務局長であった長与専齋の尽力によって京都司薬場が併設され、長与の顧問をしていた青年薬学者ヘルツが監督となった。ヘルツはおよそ二年のあいだ明石と協同して京都に理化学技術・教育の基礎を根付かせたが、明治九年（一八七七）八月に京都司薬場が閉鎖することに伴い、横浜司薬場へと召還された。

ヘルツが去った後、困り果てた博高たちは、明治二年（一八七九）三月、当時、大学南校（東京大学 法・理・文三学部の前身）で教授していたドイツ出身の化学者ゴットフリート・ワグネル（Gottfried Wagnere, 一八三二～一八九二）を招くことに成功し、舎密局内に化学校を新設した。ワグネルはここで理化学一般について講義するとともに七宝、ガラス、石鹼、ビール、清涼飲料水の製法など、諸般の工業化学や薬品製造の実地指導を行い、多くの優れた日本人理化学者を輩出していく。そのなかには、化学製薬の小泉俊太郎、理化学分析の上田勝彦や喜多川善比らがあり、またワグネルから旋盤の使用法などを取得した理化学機器の初代島津源蔵もそのなかに位置づけられる。このように、多くのお雇い外国人とのかかわりのなかで、明石は京都舎密局を発展させ、京都の理化学教育の深化そして技術の発展に奔走したのである。

